

栽培法改善や適期収穫などにより低コスト高品質をめざす

農産物の生産資材高騰や販売価格が低迷する中で、栽培の低コスト化と共に高品質生産が求められている。当センターでは野菜、果樹及び切り花類など多岐にわたる農産物の生産コスト削減や品質向上栽培技術の開発に取り組んでいる。

野菜栽培の低コスト化の一つの方法として、減肥栽培があげられる。畝立て同時施肥機を用いた秋冬ハクサイ栽培では、初期生育が優れ大幅な施肥量削減が期待できる。また、寒玉系キャベツ栽培にレタス収穫後のマルチやトンネルを利用し、は種時期と

の組み合わせで端境期収穫が可能となり、新作物として普及が見込まれる。

さらに、県内都市近郊で栽培が多く収穫適期が短いイチジクでは、カラーチャートを用いた収穫適期判定により品質の安定化が期待される。小ギクの高温暖作型で問題となる黄変葉発生の対策としては、花のしおれや落葉を促すホルモンの発生を抑え、品質を維持する技術を開発したので紹介する。

福嶋 昭（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2423）

秋冬ハクサイの施肥量削減につながる畝立同時作条施肥技術

畝立同時施肥により基肥を作条施用することで初期生育が優れ、この方法により基肥で最大50%、トータル窒素成分で24%施肥量を削減しても慣行と同等の収量が得られた。

内 容

淡路の野菜生産では、省力化、肥料コスト削減のため、施肥機を利用した畝立同時施肥技術が普及しつつあり、島内50戸以上で導入されている。しかし、降雨の影響を受ける裸地栽培では、安定した施肥量削減が難しい。そこで、定植する2条にすじ状に浅く基肥を散布する方法（作条施肥）により、ハクサイの施肥量削減技術の可能性を検討した。

まず、2009年に、基肥の適正量を把握するため、IB複合化成（速効性を4割含む）を、慣行の20%及び40%減肥し、すじ状に手散布した後、小型カルチで浅く土に混和した。追肥は慣行と同様に行った。その結果、作条施肥により初期生育が優れ、40%減肥しても慣行と同等以上の結球重が得られた（図）。次に2010年に、施肥機を用い、ロータリ直後から2条に肥料を投下し、成型板で寄せた土を軽く覆土し作条施肥した（表紙写真）。慣行の30%及び50%減肥し、追肥は慣行に準じ行った。前年同様、慣行に比べ初期生育が優れ、基肥50%減肥でも結球重

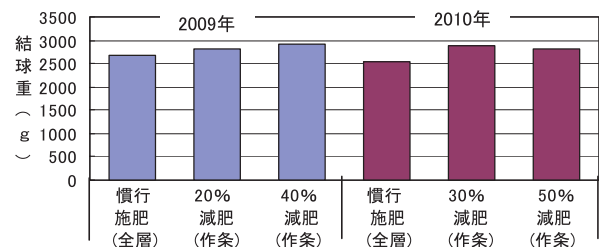
は同等以上となり、施肥機による作条施肥の効果が再現できた（図）。基肥の作条施肥により、定植直後から速やかに効率よく肥料吸収が行われることで減肥が可能になると考えられた。

普及上の注意事項

畝立成型機の機種によっては、施肥パイプを取り付けるためのロータリーカバーの改造が必要となる。

西野 勝（淡路 農業部）

（問い合わせ先 電話：0799-42-4880）



基肥の施肥量、施肥方法の違いがハクサイの収量に及ぼす影響

品種：「CRひろ黄」
 慣行施肥：基肥：IB複合化成（18-10-9）100kg/10a 追肥1、2回目：硝磷加安（15-10-10）80kg/10a 追肥3回目：NK化成（18-0-18）40kg/10a
 （2009年）播種：9月15日（128穴セルトレイ） 定植：10月1日 収穫：1月7日
 （2010年）播種：9月15日（128穴セルトレイ） 定植：10月8日 収穫：1月17日